

学位論文要旨

学位論文題目

中国の農村義務教育の現状と課題——貴州省における実態調査を中心にして——

申請者氏名 周丹

本論文は農村義務教育の質改善の阻害要因を解明することを研究目的としている。農村義務教育の質改善の阻害要因は財政投入不足のほかに、新たな義務教育保障制度を導入したが、農村への義務教育投資の利用効率が低いことではないかという問題意識を持ちながら、歴史的変遷を追い、データ分析と実地調査を行った。

まず、中国建国以降の義務教育の歴史的変遷から分かるように農村小学校の学校建設・運営、そして教師の募集は長期間において農村・農民に委ねられていた。また、農村義務教育経費は長期的に農村財政または農民負担に依存しており、教師の能力は不確かであり、その待遇も悪かったという先行研究で指摘されている農村義務教育問題を確認した。この長期にわたる教育経費不足と人材不足問題は農村義務教育の発展にとって大きな支障となったことが明らかになった。

また、教育経費や教師の待遇などに関するデータから、都市と農村教育経費・教育人材配置の格差が縮小していることが分かった。しかし、都市と農村の教育経費や人材配置の差が依然として存在していることも明らかになっている。

さらに、農村義務教育の質改善を阻害する要因を解明するために農村の小学校で現地調査を行った。調査を通して、郷村小学校及び教師は県政府と郷村社会の間で孤立し、教育機関及び教師としての機能が十分に果たすことができない状況に陥っていることが明らかになった。具体的に言えば、農村小学校においては県から村への教育資源の不均等な配分と県政府から依頼される教育に直接関係のない大量の仕事という問題が存在している。また、農村小学校と農村の関係が共生関係から、相互に疎遠な関係に変質した。

教師のインタビューから保護者（親）は教師の仕事をむずかしくしていることが分かったが、この問題を教師の立場で単純に捉えるのが妥当ではないと考えて、保護者（親）に対してもインタビューを行った。保護者（親）の教育への考え方は多様化し、必ずしも教育を軽視するものではない。これは教師の保護者への見解とは異なった結果となっている。一方、保護者（親）は子どもの教育への参加において

は放任の姿勢が見られる。これは保護者の教育への考え方と矛盾している。それは保護者（親）として子どものことを大事に思っているという自己アピールもあった可能性があるが、子どもの教育において何ができるのか分からないという理由もあると考えられる。保護者（親）の教育に対する理解が乏しいことが明らかになっている。

先行研究を踏まえたインタビューの分析から、県郷鎮政府・郷村小学校・郷村社会の三者関係が変質したことに基づいて、郷村義務教育の質改善の阻害要因を明らかにした。

まず、郷鎮政府と郷村社会との疎遠である。郷鎮政府の管理責任と支出責任が税費改革によって次第に上級政府に移譲されることになった。これは郷鎮政府に農民との従来の信頼関係を失わせる結果となった。そのため郷鎮政府は半ば機能停止とも言える状態になっている。農村・農民に関わる仕事の展開も困難である。

また、県・郷鎮政府に管理される農村小学校の問題である。農村小学校の建設・運営は政府の財政を頼り、県政府に管理されている。県政府による学校に対する評価は学校のボーナスと直接な関係がある。県政府はこの効果的な手段で学校教師を手足のように自由に使うことができている。

最後に、郷村小学校と郷村社会との疎遠である。義務教育制度及び教育経費保障制度の改革につれ、教育現場において新たな課題が現れている。それは農村小学校は農村・農民に頼って学校建設・運営されるというモデルから次第に離れ、外部から管理され、農村に設置される教育出張所と見なされていることである。このため、郷村小学校が郷村の一部として認められず、農民の協力を得ることが困難となり、教育機関としての役割が十分に果たせない状況に陥っている。

郷村小学校の教師と農民という人間関係から見れば、相互の感情も疎遠になっている。郷村小学校の教師は郷村に対しての親近感を持たず、彼らは政府から給料をもらい、县城から郷村へと通勤するただのサラリーマンにすぎない。かつての農民と信頼関係を結んでいた農民教師のかわりに、今は農民とコミュニケーションを取れない、あるいはコミュニケーションが取れないことが問題と分かりながらも、あえてコミュニケーションを取る努力をしないサラリーマン教師が郷村の学校にはたくさんいるという現状である。

このような相互に疎遠な関係のもとで、学校・教師と保護者相互の理解が不足し、コミュニケーションが取れない状況に陥っている。郷村小学校は物理的には郷村に位置しているが、心理的または感情的には郷村と離れており、農民にも受け入れられていない「空に浮く島」である。郷村小学校教師も郷村の小学校で仕事をしているが、心理的に農村と離れて、農民にも受けられていないサラリーマン教師となっている。

以上が農村小学校を機能不全に陥らせている原因であるという結論に至った。

学位論文審査の概要と結果

報告番号	東アジア博 甲 第 128号	氏 名	周 丹
論文題目	中国の農村義務教育の現状と課題 ——貴州省における実態調査を中心にして——		
(論文審査概要)			
<p>I. 学位論文の概要</p> <p>周丹氏の学位論文は、中国農村義務教育の現場でのインタビュー調査をもとに、その現状を明らかにするとともに、中国農村義務教育の質改善を阻害する要因を解明することをその目的とするものである。従来 of 先行研究では、主に都市と農村の比較によって「都市並み」となっていない農村義務教育に対して財政投資がより必要であるとの主張が多い。これに対して本学位論文は農村の現状に即して何が問題となっているのかということに注目すべきと主張し、義務教育制度改革の進展によって現在の小学校が置かれた新たな状況（「空に浮く島」）や現場の教師・保護者の意識といった観点から農村義務教育問題を考察したという点に独自性を持つ。また、現場でのインタビュー手法は対象者の多様性に配慮したものとなっており、妥当なものである。</p>			
<p>II. 学位論文の構成と各章の内容</p> <p>本学位論文は、以下の各章および付録資料（学校へのアンケート調査票、インタビューの内容と記録など）からなっている。以下、各章の内容を簡潔に説明する。</p> <p>第1章 研究目的と研究課題の提起</p> <p>問題の提起、先行研究の検討、研究目的と研究課題の提示、研究の意義・独自性について述べる。</p> <p>第2章 中国義務教育の歴史変遷</p> <p>中国における義務教育制度の変遷について、中華人民共和国建国から無料の義務教育が中国全土に広がる2006年の義務教育法改正までを整理し、義務教育が軽視されていた状況から中央政府による移転支出によって農村義務教育へ重点投資がなされるようになった経緯と具体的な制度改革の内容をまとめ、中央政府の財政的補填と県政府の管理のもとで義務教育が整備されていく過程を明らかにしている。</p> <p>第3章 農村義務教育への投資増加の検証</p> <p>中国農村義務教育への重点投資の内容とその効果について、1990年代末から2016年までについて政府発行の統計資料やデータに依拠しつつ検証し、中国農村義務教育に対して相当程度の資金が重点的に投下され、都市と農村との間の物質的教育環境の格差が縮小していることを明らかにしている。</p> <p>第4章 農村小学校教育の現状——小学校教師へのインタビューを中心に</p> <p>前章で明らかになった都市と農村の物質的教育環境の格差縮小が実際の現場にどのように影響しているのかを実際に現地に赴き、教育の当事者たる教師へのインタビューを用いて明らかにしようとしている。農村小学校が農村から生まれたものから農村の外部によって設置・管理される機関となることで教師の教育以外での多忙（県鎮政府からの業務）や農村社会とのつながりの希薄化が生じていること、他の公務員と比較して賃金などの待遇が依然として劣っていること、児童の学習意欲と保護者による教育への関与の低いことなどが農村教師を孤立させ、その教育への情熱を奪い、教師としての自覚を弱くする結果につながっていると分析している。</p> <p>第5章 農民から見える小学校教育——保護者のインタビュー調査から</p> <p>保護者に対するインタビューを行い、この分析を通じて、保護者が児童の教育は重要だと認識しながらも十分にこれへ関与しないことや教師との交流・情報交換の必要性に関する認識の欠如の背景として、保護者自身が不十分な農村義務教育を受けたこと、これによる教育への劣等感、また農村の人間関係における閉鎖性を指摘している。</p>			

第6章 現在の中国農村義務教育の核心

中国農村義務教育がその質改善において成果を上げない原因について、義務教育制度改革の進展の結果として県郷鎮政府、郷村小学校、郷村社会の三者関係が変容し、①郷鎮政府から上級政府である県政府へ小学校の管理責任が吸収されたことで、郷鎮政府が郷村社会に対する機能を失っていること、②同時に、小学校が県政府によって行政上の業務の実施機関として利用され、これが現場における教育への注力を妨げていること、③郷村小学校が農村外部によって設置管理されるようになったことで農村社会との関係が希薄化し、「空に浮く鳥」のような存在になってしまっていることを明らかにしている。また同時に、そうした三者関係を基層として、教師と保護者の関係も以前の親密なものから疎遠なものとなり、教師が農村を出自とする「農民教師」から農村外からやってくる「サラリーマン教師」へ変化し、保護者は農村の閉鎖性などから十分に教師とコミュニケーションが取れない状況にあり、児童の教育に関与することに対して悪影響を与えていると分析している。

Ⅲ. 各審査項目の評価

1. 創造性

農村義務教育の遅れと「都市並み」へ向けての財政投資増加に必要性を説く従来の先行研究に対して、農村義務教育の現状と現場が抱えている問題を直接対象とすることで、農村義務教育問題に新たな論点を加えており、本研究テーマへの貢献が明確であることから、創造性の観点において優れている。

2. 論理性

論文中に日本語表現としての不備や誤字が残されているが、農村義務教育に対して行われてきた制度改革について、歴史的な経緯を整理し、かつ政府発行のデータを用いてこの改革がどのような変化をもたらしているかを検討している。加えて、そのようなデータによるのみでなく、現地で収集したアンケートやインタビューを分析することによって改革の実際上の効果や影響を確認・検証し、農村義務教育の質改善を阻害する要因を分析しており、論理性の観点において達成できている。

3. 厳格性

先行研究について中国語、日本語文献を中心に広く渉猟し、検討されている。さらに挙証に用いるデータや現地でのアンケートやインタビューについても厳格に用いることに努めており、インタビュー対象者の多様性に配慮しつつ分析を行っていることから、厳格性の観点から達成できている。

4. 発展性(選択的記述項目)

終章において、劉(2016)の「空に浮く鳥」という概念を行政組織上の問題や教師や保護者の意識面からより精緻化することを試みており、この試みについてはさらに検討を要する部分は残されているが、将来の研究の発展可能性をうかがわせるものとなっており、発展性の観点において優れている。

Ⅳ. 全体の評価と審査結果

上記各項目の評価を踏まえて、論文中に日本語表現や誤字の問題は残されているが、本学位論文が明らかにしようとしていることには独創性が認められ、かつ論理性、厳格性において達成されており、今後の発展性もうかがえることから、全体として優れていると判断できる。

以上より、審査委員会は学位論文審査について合と判定する。

論文審査結果

合・否

審査委員

(氏名) 山本 勝也

(氏名) 田中 柳 絵

(氏名) 朝水 宗彦

(氏名) 豊 真折

(氏名) 石 龍 潭